

マハティール前首相、UMNO を離党 (2008.5.19)

マハティールはなぜ「闇將軍」になれなかったのか？

中村正志

(アジア経済研究所)

5 月 19 日にマハティール前首相が、アブドゥラ首相の退任を求めて離党の意思を表明した (21 日に党最高評議会が離党届を受理)。マハティールは、UMNO 所属議員と党員に対して彼の後に続くよう訴えているが、22 日現在、議員や党幹部のなかに離党を表明した者はいない。マハティールの地元クダ州では数百人規模の離党者が出ているものの、おそらく、マハティールの要請に応える議員や幹部は今後も現れないだろう。マハティールが党内で実質的な影響力をもっていないことは、2006 年にお膝元のクバン・パス支部で行われた党大会代議員選出選挙にすら勝てなかったという事実がはっきりと物語っている。

日本ではかつて、田中角栄元首相が退任・離党後も強い影響力をもち、「目白の闇將軍」と呼ばれた。一方、22 年にわたる首相在任時にあれだけの権勢を誇ったマハティールは、いまではいわゆる「ただの人」である。マスコミの注目を浴びる著名人としての社会的影響力はあるが、ひとりで政局を動かすだけの力はない。なぜマハティールは「闇將軍」になれなかったのだろうか。

それは主として、(1)首相・UMNO 総裁の権限が強く、(2)その権限は制度によって保障されている、という 2 つの事実による。この点について事細かに叙述する余裕はないので、とくに重要と思われる権限を 2 つだけ指摘しておこう。それは、(1)総選挙の党公認候補指名権、(2)州連絡評議会議長・副議長任命権、の 2 つである。この 2 つによって、党総裁は中央・地方の双方で広範な人事権を得ている。党規約上、公認候補指名権は最高評議会にあるが、第 1 回総選挙以来、総裁に実質的な指名権が与えられている。また、下院選・州議会選ともに小選挙区制で行われることが、公認候補指名権の影響力資源としての性質を高めている。一方、州連絡評議会正副議長の任命権は党規約で保障されている。

こうした制度の下では、首相・党総裁と対立する者が資金力などを背景に政治的影響力を行使する余地は少ない。長らく首相を務め高度経済成長という実績を残したマハティールに

は、依然としてある程度の権威はあるかもしれない。しかし現職のもつ権力の前では、元首相がもつ権威の効果はたかが知れている。

ただし、権威による裏付けが一切なければ権力自体が成り立たない、という点も考慮しておく必要がある。指揮系統に従うという約束事が守られなくなれば、強大な軍事政権もあつてなく崩壊する。3月の総選挙での大敗によって、アブドゥラの権威が著しく低下したのは間違いない。マハティールの離党がさしたる影響を及ぼさないとしても、将来なにかをきっかけにアブドゥラが辞任に追い込まれる、あるいはまったくのレームダックと化す可能性は否定できないのではないだろうか。■